
おもかき！

秀泉今友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おもかき！

【Nコード】

N6890Z

【作者名】

秀泉今友

【あらすじ】

「おもかき！」は、「思いつき書きなぐり」の略です。文字通り思いついたものを書きなぐって投稿します。

基本1ページ完結！でも後々同じキャラクターで違う話を書くかも！そんな感じの無計画的短編集です！

アマノジャクと自業自得(?)

「おい、ちよつと右にどいてくれ」

後ろの男子にそう言われて私は『左』に体をずらす。

「古典の先生が読んでたよ」

そう言われて私は『現代文の先生』を探した。やや不機嫌になりながらも何の用かと訊ねると「このプリントはクラスで配らないでください」だそうだ。

先生、あなたまでも私をアマノジャク扱いですか……さすがに泣けてきた。

私、天之路約あまのじやくには、あだ名がたくさんある。

『アマノ、アマノジ、ツツマ、ツーちゃん、ツツ、ツツちゃん、ツツチ』そして最後に『アマノジャク』

どっかのバカな野郎が私の名前を『つづま』ではなく『やく』と読んだからだ。

『天之路約』 『あまのじやく』 『アマノジャク』。最悪。

名付け親の彼は反省して、それ以降、私を『ツツマ』と呼んでいたが、周囲の友人が面白がって私のことを『アマノジャク』と呼び、それが広まって今では学校の大半の生徒が私のことを『アマノジャク』と呼んでいる。さらに一部の生徒は、私に何か用がある時、真逆の事を言ってくる。そしてつい先ほど、先生までもが……。ストレスが溜まりに溜まった私は、発信源である彼に「昼間の道では正面に気をつけて」と耳元で囁ささやいてあげた。

するとその日以降、彼が帰り道で挙動不審な動きを見せていると、度々耳にする。

いい気味ザマス。オホホホホ……と、罪悪感を振り払うために、

心の中で高笑い。

そしてそれに耐えきれずに後日、「前のあれ、冗談だから」と笑顔で言ったら彼は怯えた眼差しで私を見て、あわてて帰宅し、次の日休んでしまった。

心配なのでその日の内に「いつも明るい君がいないからクラスは静かで寂しい」といった内容のメールを送信。

彼はそれから学校に来てません。なんで？

「二年三組、天之路約。生徒指導室まで来なさい」

突然の、放送での呼び出しにびくびくしながら生徒指導室へ向かう。ドアの前に立ち深呼吸。落ち着いてから二回ノックをして「失礼します」と小声で言う。中には誰も居らず、休み時間終了間際まで待ったが、先生は現れなかった。

次の休み時間、再び同じ内容の放送での呼び出しにびくびくしながら以下同文。

次の休み時間、以下同文。

放課後になり、担任の先生から、なぜ放送に応えたのか、と怒られた。ああなるほど、生徒指導室に来なさいとは担任のところまで来なさいという意味でしたか。いい加減怒るのも説明するのも否定するのも疲れてきたので、とりあえずアマノジャクを演じる。

「わかり易すぎて笑えます」 訳：「わかり難すぎて笑えませぬ」

皮肉を込めてそう言うところ先生は数秒間考えてから声を荒げた。

「二度と言うな！」 訳：「もういつペン言ってみろ！」

面倒に感じるが、即座に答える。

「わかり易すぎて笑えます」 訳：「わかり難すぎて笑えませぬ」

「扶養者の方を追い返すぞ！」 訳：「保護者の方を呼び出すぞ！」

このままでは訳がわからないまま私のペアレンツが呼び出され、訳の分からないお叱りを受ける恐れが出てきたので、誠に苛立たし

いのだが、アマノジヤクを否定するための説明をした。が、それは全て逆だと思われた。

「……あの、いい加減面倒なので普通に話しをしてもらえませんか？」

涙が溢れる一歩手前。だがそのためか、ようやく私の話を正しく理解してくれたらしい。

「あれ？ 天之路と話しをする時は真逆の事を言わないといけな
いって話しを聞いたんだが……」

「先生、それは悪ノリから生まれた虚偽です」

「じつはそれも真逆の意味だったり」

Bannon、と机を手のひらで叩くと、先生は「悪い悪い」と言っ
て真面目な顔になる。

「実は日下部が不登校になった原因はお前にある、って保護者の
方が言ってきたんだが……、心当たりないか？」

日下部とは、「約わたしのなまえ」を「やく」と読んで、呼んだ彼だ。

私が原因？ そんな覚えは……あった。一つだけあった。

「なんだ？」 そんなにバツの悪そうな顔をしていたのか、先生が
私に訊ねる。

「いえ、彼が不登校になる少し前 っていうかそれを説明する
前に一つ言っておかないといけないんですが、彼が、私がアマノジ
ヤクと呼ばれるようになった原因なんです。それでちよつとムカつ
いたので脅すようなことを言っしまいました」

先生はため息を吐き、「今すぐ日下部にメールしろ……」と言っ
てきた。

『みんな心配してるから、もう一回学校に来て』

先生にもこれでいいだろうか、と確認をとってから送信。

数分後、私と先生は何故か校長先生に呼び出された。

「天之路さん、君がメールしたおかげで日下部くんは明日から登

校してくれるそうだ」

「それはよかったです」

「まったくだ！」

何故か興奮した面持ちで机を叩く校長先生。

「そ、それで、用件は終わりですか？」

びくびくしながら確認すると「ああ。もう用はない」とおっしゃったのでドアを開けて外に出る。

「失礼しました」

そう言っただアを閉じようとすると、慌てて校長が追いかけてきた。

「天之路さんと話しをする時は真逆の事を言わないといけないんじゃない無かったのか！」

あなたもですか校長……

「わ・た・し・はっ！ ア・マ・ノ・ジャ・ク・じゃっ！ あ・り・ま・せ・んっ！ あ・ま・の・じ・つ・づ・ま、です！」

そこから本日二度目の事情説明。やんごとなき事情があつてうんたらかんたら……

いちいちこんな説明しないと会話が成立しないなんて。もういやだ、改名したい……

「おお、すまんすまん。それで、どうやら日下部くんはどうとう部屋からも出て来なくなつたらしいんだ。いったいどんなメールを送つたのか見せてもらえるかな？」

ようやく理解した校長が困り顔で頼んできた。べつにやましいことは無いので送信履歴からメールを開いて見せる。

「ふーむ……なんにもおかしいところはないのに……もう一度送ってくれるかな？」

「わかりました」

『みんな心配してるから早く学校に来て欲しいな。もう一度だけでいいから、ね?』

校長も納得の出来栄えだ。迷わず送信。

数分後、一本の電話がかかってきた。

『ちよつと！　ウチの子がドアの隙間から遺書を出して来たんだけど！』

何故に？　ああ、もしかして！　私は急いで『いままでのメールは全部本当！』と送信。

次の日から彼は、笑顔で登校を再開した。

まったく、迷惑な話だ。どうやら彼は私が送った「みんな心配してるから、もう一回学校に来て」を「誰も心配してないから、二度と来なくていいよ」と曲解したのだそうだ。そこに追い討ちをかけるように似たような内容のメールを送ったものだから

誰だ、私をアマノジャクって言ったのは。

……ああ、彼だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6890z/>

おもかき！

2011年12月23日01時49分発行